

報 龍 屋 新 聞

報 龍 屋 新 聞 社
TEL 0470-92-9912
FAX 99-28
鴨川市代623

社 告
「ただいま」
先への連絡が
かたきです。
ラッシャーを
切手差入れを
受付中。
連絡先 〒900
那覇市松山
2-23-17
カマツ306
濱井武実
(たじ3月10日誌)

荷車 阿蘇から水俣へ

謎に包まれた

身障用トイレ

者



2月11日 八代城跡

〔八代城跡第一番春〕

八代の街に着いたのは夜の八時過ぎであった。国道三号線を離れて市街地に荷車を曳きながら入っていく。離れて三十分も歩いたら右手に森が見えてきた。運動公園方面の標記を先にどこかで目にしたから、もしかしたらそれがもしかれない。朝もないうち夜露を浴びながら、南かたのままの門の中へ車を引き入れる。森の中には二階建ての建物が何棟かあ

る。板に書かれた方向案内には「図書室方面」だ。「会議室」だのと、いくつか書かれてあった。運動公園にはなじまないものはかりだ。もしかししたら、市校がもしれない。だとしたら、夜間警備の人が見回りにくるはずだ。門が開放しはなっていたとしても勝手に野宿したらつまみ出されるのがオチだ。オチは再び道に出る。反対側に堀があり、石組みが見えた。八代城跡なのだろう。

横断道を渡り、その奥の木橋を渡って城内に入っていく。外灯に照らされた城内に人影はない。ミニミニの松の大木が立っている。ニートルの高木の植込みも目に入る。樹木の下は芝生が植えられて、足底の感触はゆるやかだ。広くはない城内をひと回りしてみる。隅々まで清掃が行き届いている。一ヶ所だけ明があらとしたコーナーが目に入る。トイレだった。

「ここは静かだし、管理している相手が八代市だ。市民用の空間なら、たとえ野宿しても不法侵入者として摘み出されることもあるまい。それにトイレもあり朝の用を考えると便利だ。」オチは、ここと思おう所に荷車をひと乗り入れた。背の高い

- 3/2 佐賀呼子町の吉林屋
- 3/3 熊本県玉名市シムバスター寺周の雑木切りと龍桃さん
- 3/4 阿蘇まで車を送ってもらう。
- 若井康彦氏と「山頭火」で飲む
- 3/6 阿蘇外輪山への三閉坂を登る
- 3/7 Rで別府へ。林まよき(竹三)さんに会う。翌日は阿部晋蔵桐畑
- 3/10 「新聞16号」できる
- 3/11 阿蘇郡産出うぐいすで免道
- 3/12 水俣入り。鹿児島との風景に
- い石巻の山地に天野哉(製茶業、ま吉本哲郎氏と共に訪ねる)のむ。
- 3/13 水俣ゴミリサフル祭りの打ち合せ
- 3/14 竹切り、竹の子堀り(吉本氏の山)
- 3/15 宿醉。天野宅隣りの小学校
- 分校庭で竹割り。
- 3/16 終日、竹割り
- 3/17 竹割りを休み、水俣市内を車で回る。久木野の棚田
- 3/18 図書館、蓬菜、饅頭、竹林園、湯の鶴の温泉

その上に毛布を広げる。寢袋(大鹿村在住のボツからの借物)はその上で使う。下からの冷気は朝がたこたえるのだ。上からはコートをかける。

早々と床につく。七時前であろう。すぐに寝た。途中トイレで目が醒める。天上の月は満ち満ちている。寒くない。春なのだ。野宿のシーズンなのだ。再び寝袋にもぐる。夢の続きはすぐに再開された。

遠くで犬の鳴き声がする。遠いと思っていたが、立意識が少し戻りかけると、どうもナオの枕元近くで鳴っているのがわかった。同僚の連れ犬だろうか。しばらく鳴っていた。ナオが無視し続けた。最後に一声「ウーッッッ捨てゼリフならぬ捨て吠えなをかました後に立ち去った。

「そこに置いていってよか」朝の目ざめは快適だった。

トイレに行くと、入れ違いに同僚が出てきた。ナオは「おはよう」と声を掛けてみたが、相手はクラッとこちらを見ただけで視線を避けた。ナオは他人のプライベートルな領域に足を踏み込んでしまった、と言う自責の念にかりたてられた。人と語りたくないから、こうして露屋(天)暮しをしているのかもしれないのだ。

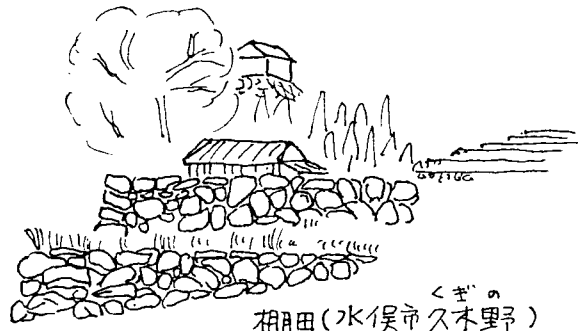
ナオは洗面台で顔を洗う。目の前の棚に目が行き、そこに石けんが置かれていたのを見つけた。半分以下に減ったそれはビールが下に敷かれてあった。彼の忘れ物であろう。ナオが洗面台を離れようとすると、再び彼が入ってきた。ヨボヨボした足取りで小柄な体を動かしている。入口近くにある身障者用のトイレに入っていく。ドアを閉め

にかかる。が、けして最後までパタッと肉めない。中の明りが男の影をドアに映し出していたが、便座に腰をおとす風でもない。影は隅の隅に消えたかと思ふと、すぐに出てきた。ナオはすかさず、「これ、忘れものだよー」と親切な出しとしよう顔をして声を掛けた。黙ったままである。目では「はあ? 何?」と言う表情を作った。ナオはオム返えに「これ、忘れものだよー」とまた声を掛ける。数秒後に「そこに置いていってよかと」と返えってきた。張りのある、また、ビスの効いた低音が不平を伝えていた。ナオは怒られたとすら思ったほどだ。怒られて戻付いたのだ。貴重な財産であるその石けんを通りすがりの人に使い込まれては本意ははずした。置き忘れははずがない。今はただ、前夜

からの邪魔者が立ち去ってくれることを願っている。その後洗面台で洗たくをし、炊事をしなければならぬのだ。それにしてはナオが気がついたのは、洗面するはずの向に三回も身障者用トイレに入りにしていたことである。何のためだろうか、中が広いので、私物入れに使っているのかもしれない。同じ野宿仲間と言えども、彼にとってはトイレが生活の場なのであった。

夕日誌 II

水俣市石碓の天野宅へ吉本宅から向き、終日竹割りをする。寒風が吹く。



野(水俣市)の野(水俣市)の野(水俣市)の野(水俣市)

夕日誌 II

水俣市石碓の天野宅へ吉本宅から向き、終日竹割りをする。寒風が吹く。

竹壁用竹を始める。午後、芦北町の緒方正人宅を吉本氏と訪ねる。

今言金地の奥、宮崎との県境に近い水上村を訪ねる。市房山の中腹の水神様や市房神社を吉本氏の車で回る。緒正氏の料亭も同行。夜、同村湯山の箱葉守氏宅のイロリ(直径5メートル弱)を囲んで飲む。昼に水俣に戻り、石碓の天野宅で飲む。雨天のため竹割りには順延。飲んで笑ひこらげ、午後四時に皆は帰路につく。ナオは緒正さんの車に乗せてもらって、市立図書館へ。朝九時半から天野宅で竹割り。そのあと、天野父子と三人であじろ編みの壁を完成させる。これで安心して夕日誌を立てる。

でも「コーナー」
「考える」

私は歴史が大好きだ。でも、この水俣の歴史、過去の事象を証物物件にして現在を推理しようとする歴史主義者たちを信用しない。「行く」という行為は「止る」が、「帰る」という行為は「ありえない」だ。——寺止修司「行く思想」

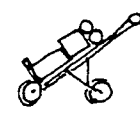
歴史は瞬時の子守唄か？

歴史主義者というコトバが使われているとこをみるみると、未だ「左翼」とか「革命」とか「唯物史観」とかのコトバが一部の人々の共通項として通用していたかみえる。幻滅に落ちた「現在」だったのだらう。そうしたモノを「歴史」から「籠屋」(このかた)「籠屋」もまた行く「思想」の持主である。

「歴史」は「過去」の現在地をたしかめるために「来た道」を戻ろうとはしない人間の類である。そして「目の前の風景」(スクリン)「ポエム」ドリスで「映画機」から流れ出る「こと」をたえず「期待」している。「荷車」の「詩」を口にして「いる」のは「望郷」の「思」に「か」ら「でも」は「け」れ「ば」あ「す」へ「胸」ふ「く」ら「ま」せ「る」た「め」で「も」な「い」。その「場」の「空」気「を」

吸いたいために外気に身をさらしている表現である。それでもこの「御人」歴史が「さら」には「ない」。証物物件を仕立てあげるためではなく「過去」を「より」よく「事象」の「安定」に「心」を「評」して「しま」う「から」だ。それは「瞬時」の「子守唄」か「もし」な「い」。その「唄」は「現在」の

「昔」に「い」く「も」た「す」く「か」ま「消」す「た」。「思」は「出」す「こ」と「す」ら「で」ま「な」い「だ」。その「瞬時」の「無為」の時「を」過「した」。「こ」う「記」憶「だけ」は「鮮」明「に」残「る」の「だ」。



八代城跡 ↓ 肥後高田

このウソにのたうち回れかし

八代城跡の「ゆが家」を後にして水俣方面、つまり南に向かう国道三号線に出るべく、球磨川の右岸を左手に沿って東に向けて歩いて行く。左手の上は人影がうすい。大の散歩をさせる老人、トレーニングウェアに身を包み、早足で歩く初老夫婦、ほかに誰もいない。三百メートル離れた対岸の左手の道路は車の洪水だ。

八時を少し回ったころと思う。なぜ時間か、ゆるか、かと言ったこの左手の上は前に小学校の正門、近くの交差点を通、たからだ。初老の男がいて、交通整理をしていた。彼は子供に、あるいは職員に横断道の誘導をしたあと、腕時計をのぞいて時を告

げていた。教人の女の子たちがその男に「おはようございます」と言いながら道を渡った。田村も「おはよう」と言いながら腕をまくり、「いま七時五十三分と機械的に告げる。次の一回に對しても、いま七時五十分」と言う。聞き手もそのアナウンスにいちいち反応はしない。ナオもその音の出る「時計」をまたまたま耳にして、時刻を知った。

左手を車をキヤロほど上流へ行く三号線と交又する。その道には登校途次の高校生の自転車車の列が続いている。対岸の建物の屋上には「八代工業高校」と書かれてある。しばし、左手に腰を落し深呼吸をする。まみ、何ですなあ。

拾い書 落 肥後高田駅で

この川面はほめたたが、野宿よ、おいでおいでをよしている風。どこにゴロンと横になっても風邪を引く心配がない風。どこでも言、まじやうか、戸外の動きを自由にしてくれる風。これはいいや。三号線を南に三キロか田キロ行ったところ、に小工な駅舎が

あった。丁度鹿児島本線、八代駅の北と南にある肥後高田駅だった。

無くてもその上、養育費すらない。三平ほどの待合室があり、そこにはベンチが向い合って設置されている。別々に三つづつ振えられている。別々に時刻表が張られ、その上に反皿があるだけだった。

イスの背のうしろの壁には落書きがびっしり書かれていた。エッセイ的なものやうな思想の期待して文字を並べてみる。

眠れない夜
どこか知らない国を想像する
どの国は今、怪で
皆汗を流して動いている。
そんなことを考えても、
この間にが過ぎてく。T.S.
エッセイ的な内容ではなかった。

「ウソをつくな」と大人は言うけれど、ウソを言わない大人なんて今の世の中にもいない。誰でもない、でも、これから僕が出会う人たちの中で、

誰でもない、本当に正直な自分というれると思っ人が現れるなり、僕はその人にけっしてウソをつかない。

何故なら、その人が自分にとって鏡になるから……その人さだませば、自分をだましたことになる

T.S.さんの詩「好きだから」
By m

ナオもそのT.S.なる若者に会ってみたくなかった。高校生活はあつた。あるには、この近くに高専があるから、それより、ひとつ

ふたつ身長かもしれない。どうみても、十代の若者であろう。会って彼の「ウソ測定器」にナオの言動をかけてみようと思つた。ウソ度が低いことをナオが願っているのなら、T.S.は嬉ぶであろう。しかし、不幸にも高濃度のウソ汚染が計量されたとしたら、T.S.はどう反応するの、ナオには予測がたつ。しかし、T.S.君よ、君の詩にもうひとひりを入れようよ。これのウソにのた打ちまめる大人も、また、美しいではないかと。(暇だねえ、ナオも)

例に天草の下島が浮かんでる。彼ははえ坂きの漁師である。生まれて、中学校在学中から沖に出ている。現在も船に乗っている。水俣病で痛めつけられた体と言つことを聞かない時以外は操業しているのだ。本人は魚が大好きで、

「今回が初めてやないかなあ、二日も魚を口にせんかったのは」と笑つた。二月二十日に人吉盆地の奥深くの山村を訪ねての帰りの車中でのことだった。同時に、こつとももうした。

「こん二日間、食ひもんの旨

書誌

『常世の舟を漕いで』

緒方正人語り
け 信一 構成

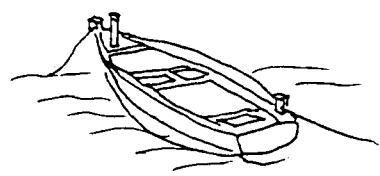
書房 織世
2060 円

水俣の北に昔北野と言つた漁業の盛んな町がある。その女島という半島に緒方正人は住んでいる。目の前の不知火海を隔てた向こう

かっただからやろう、訪ねた先の友人のまてなしへの感謝の念であった。

緒方正人はその動機を語っている。「責任とは痛みを共有」。これが痛まずにそれを「責任をどうととる」まそつとして、あたかも商取引

の歴史がある。



常世の舟

1974年に水俣病認定申請患者協議会に加わり、ケソノ具國を相手に争つてきた。そして82年には協議会の会長に推される。が、その四年後、任期切れを待つて辞し、その直後に申請そのものを取り下げた。

のように、「これだけの金額で我慢してくれ」と言う。損害賠償を払えば責任が完結するかのよう
に錯覚する。カネは責任という言葉に交換され、この交換によ
て、何が重要なものが失われてく
それで、交換を拒否するために緒方正人は申請をとり下げた。
たえず、今をまき、彼はその後
後にケツンに死んで「問いかげの書」を送る。返書があったが返事を成してはなかった。ケツンに
こころの思いを表明するために木の舟を造ってケツンへ行き、
そこに身を晒すことにした。ケツンの工場のはじめあつて向
こころから水が流れてくるので「ケツンから海がながる」といって
それを押して「海」と思ふたのです。命の源はここなんだと「木
の舟にのりだつたのはケツンの強化。プラスチックの船でできたよう
車とか舟とかで行くのは海にさら
るからです。プラスチックには、

ケツンが作ったよなものは、ケツンには
つても、自然には運ばれぬ品物です。
海に出ればすぐゆかります。海な
です。海はケツンです。そのケツン
のケツンで、どこも舟に乗ると、
が嫌になつた。「彼は舟に前世の舟と銘を
して舟出。ケツン水保工場は
くの海を舟をなま、そこから
用意しておいたリカーに、ケツンや
ケツン、海を載せてケツン玉」ま
で歩き、門前に姿を現す。
そして「身を晒すのです」「
何も要求しようとは思つてな
ただ、今日と明日をケツン
の前で暮らす。自分の身を晒
すはケツンだけですよ。あと
受けとり方はどうするに任せます。
舟は人はいらぬぞ」「相手の受け
とり方が予測できるからつたす
けは、自分の行動に保険をか
けておくよなものは、海には
さらば、面白くないです。」

水保病患者という集団の一員
ではなく、緒方正人という個に
戻って、身を晒す彼も、ひとりの
不調の者と言えようか。
「水保に起つた」は、どこか
来たんで「ケツン」と人に向け
た彼は、どこかに答えたコト、
「仙さんの背中からかもしれん
だ。善と思ひは表裏一体
なのだ」と彼は言つた。
不調とは常軌にはずれること
を言う。これは英雄の特徴で
もあることだ。緒方正人は
不調の者であり、のたうち回
る人もある。

でもある。
が、その大道芸が、いつたん、ステ
の上に押しあつたならば、それ
は舞台の上で演じられるつもり
でいなくなる。それは晒し者の芸
ではない。若しくは、一見、深化し
たかのように見えるものは、実は
牙と引換えに受けとつた身を金
でかたいたのだ。
緒方正人が認定申請を取り下げ
た時に、泉斤の役人はどんな顔
をしたか？ 自分なりに都合のいい
と思つたらうか。勝つた」と言
感ではなかつた、と緒方正人は
「患者集団の目線ではなく、緒
方正人という個に戻つていたから、
相手は役人面をすることができ
なく、自分の個としての顔がど
だ、たかなと探して、ケツン、感
だつた。「そこには、今まで見え
たことのない、限界の表情が現
れていたといふ。」

情報おき

○ 蓬萊鐘頭(水保市) 一個七円。赤黒、白、白の三種。おいしよ
○ 水保コミリサイクル祭り 三月五日開催。水保市の環境課では、ゴミ処分場をなくすことを目標にしている。ゴミの減量は、ゴミの出ない生活を目指している。リサイクル品、お土産を入手しない。店の品揃えも工夫し、エコグッズの認定をする。また、シニア人材を活用した修理センターを作り、再利用の価値を高め、また、交換市を用き、三五年後には、エコな環境を見守ることを水保で南く。
○ 稲垣尚友竹工展 この夏、MUNION(布東京)社の企画で全国巡回展である。北は札幌から南は鹿児島までの縦断展である。また、森進一展だ。詳細は後日お知らせします。

「晒す、曬す、曝す、暴す」

どれもサラスである。平仄社の「字通」によると、暴すは

「獣屍がさらされて、白い骨組みぎ（この世に残っている形）」とある。また、曬すは「強烈な

陽光にさらされること」とある。どちらも尋常ではない。

荷車を曳くのは何^かが先に見えていて、それに向ういくのではない。見えないうちから曳くのである。

曳くこと何^かと出合えることを満身の思いを込めて待ち構えていた。

曳く行為、それは晒す行為でもある。（でも白骨死体にはな

りたくないね）晒すことと待

ち構えていることとは、この身に同居している

「一時的に先方に接近し、笑顔をふりまけばかりではない。時に、先方からこちうに寄ってくることもある。これを晒すことで、先方からのハタラキカケがよりスムーズになること

もありえる。だから、こちうから火の中に飛び入り、先方がこちうに飛び込んでくる。晒す行為は出合える機会を増進させるのだ。ただ、それは結果であり、その数値計算だけを振り廻して、晒す行為をこれに課すことはむずかしい。

その行為の中に安心を得られるから続けていられるのだ。

「晒す行為に安心を得る

「晒す行為に安心を得る

「晒す行為に安心を得る

「晒す行為に安心を得る

「晒す行為に安心を得る

「晒す行為に安心を得る

「晒す行為に安心を得る

A子ネエ

「どこそこに行くときや、ヨシ子の写真を持ちようにや」

と、ナオに言った。あごを引き、笑いをこらえるような、いたずら

ほくも人はつこい表情を作った。それはネエが二葉の写真と奥

の部屋から持ち出してきて、ナオに見せた直後であった。

二葉は四年前にナオがこの家を訪ねた折に、今はなき息子の

のぶ男が撮ったものだった。もう二葉は八年前のものだ。ナオ

とよその三人の子供が横一列に並んでいる。ナオのつれ合ひで

あり、子供うの母親であるヨシ子が死んで一ヶ月のころのものだ。

ヨシ子が死んで一ヶ月のころのものだ。

鹿見島 亀島 奄美大島

沖繩

その時四人はワゴン車で移動していた。鹿見島をかめきりに北上し、現住所の序総までを十二箇所で駆け抜けた時のスナップ写真である。広島の中の

宿を訪ねた時のものだ。まだ子供うは幼なく、現在では百々セシナの身長に

なった高三の男の子が、百々セシナがそこの小学六年生であった。

「あんたの子供う、大きくはなつたらうでえ？ 見欲しか」

と、A子ネエは目を細め子供うを想うのだった。

A子ネエはまだ三人に会ったことかはい。しかし、母親であるヨシ子との思

い出が強烈であったのか、三人の子供うを親しい者とわけていた。

ヨシ子が臥蛇島を初めて訪ねたのは十八歳の高校三年生の折だった。夏休

を利用して四十日間滞在したという。それはその時の様子を何度もA子ネエと

話している。

「ウーン」

とだけナオが答える。

その夫のS男アニから聞かされていた。誰か撮ったのか、当時の写真も、ナオが

その何年か後に島を訪ねたときに、見せてもらった。美形の娘であった。彼女は

水着姿でもあり、若しナオは並ならぬ眼でその写真を見たものである。

それから半年後、ナオは彼女と東京で会った。そして、いろいろのいきさつがあ

って、七年後に一緒になるのである。だから、あの一枚の写真はナオにとっては

かけがえのないものであったわけだ。

A子ネエは持ち出してきた二葉の写真に何回も目を過したあと、

「ヨシ子さんはええ人やったなあ、心のやさしい」

と、ナオに同意を求めようとして、テーブルの反対側から語りかける。

「ウーン」

とだけナオが答える。

解説「用語」

晒す行為に安心を得る

のぶ男が嬉びヨシ子が見守るタビ

臥蛇島最後の島民 岡山市

「まだ何か別のコトバをナオから引出したいと思ひ、A子は小さな笑顔を見せず、無言のままにナオの表情をうかがった。だが、ナオは何も口をなげない。ナオの才では心の隅で、こけはった意地を張っていた。今回の荷車曳きは回想の夕日ではなかった。つれ合ひも子供もナオにとって大切な存在ではあるが、いまの感じの的はそこにはない。何故に荷車を曳いてるのかさえ、本人はさだかではないのだし、少しも明瞭な輪郭がかくがぼかびよって、くれればありがたい、とそれを願うての日々なのだ。ナオにはA子のようなやわらかな表情がどうしても出てこない。逆にこわばるのだ。それを少しでもほぐせないだろうか、と気がかってA子と向き合っている。ナオの無言にじびを感らしたかのように、A子は言う。「ヨシ子さんの写真は持ちましたか?」「いや」「どこへ行くとき、ヨシ子

の写真を持ちました」と、諭すような念を押すような、それでいて相手を包み込むような、笑顔の中のそく言いた。それは島の人情の家族思いのやさしさでもある。「ヨシ子がタビの無事を見守ってくれとよろよろうて」と、しめくくった。A子ネエは話題を変え、「今夜はぶ甲力が嬉しかったろう。ナオさんと一緒や」とニコソク。床の間と並んで仏壇が据えられてある。その前にはかくに入られたの、ぶ甲力の白黒写真が立てられてある。三才オのくまかな顔が笑いかけてくる。写真のほかに供物もいくつか供えられてる。一周忌をして間もないからだろう。小学二年になる男の子の書始めも父親のオから読めるようにして二枚、供物の上に並べられていた。

普段は誰も寝ないこの居間に、今夜はナオが布団を敷くことになる。いつ訪ねてもナオはミニに床をどいた。客間として使われてる。A子はふと目がしらを押さえた。ナオを目の前にして思ひがこめ上りてきたのだ。また中学生だったのぶ甲がナオの尻に付いて回っていたころのことを思い出していた。ナオはそれを察して「憶えち、かり、オイトンとのぶ甲と日高先生と三人でオクホに山羊つかまえに行つたときのこと。帰りが暗くなつて、山羊の白さだけを頼りに山道を帰つ着いたが、A子ネエが心配して、学校上まで懐中電灯持て迎に来てくれたが、「おぼえとッ」と言えて、A子はまた目を手でぬぐった。ナオは「回想」に来たのではないと思ひ、「のぶ甲へ線香立てに来たのだ」と思つた。

でも、それを強調したところで、意味のほりことも承知していた。荷車曳きの何であるかを語る場でもない。残酷な仕打ちとわかつていながらも、ナオは表情をほぐす手だてがわからぬのだった。「のぶ甲に嬉はれ」「ヨシ子の写真をたまえと」を語りかけられても、ナオの中の思ひは空回りするばかりであった。



おおみそかの 大王町 波切港 (三重)